随　筆

おおさか文化論

坪　村　　宏*

1．東西文化論

東西文化論といっても東洋・西洋の話をするつもりではない．気楽に関西と関東の比較をやろうということなのでそのつもりで読んでいただきたい．筆者は奈良市に生れ19の年に東京へ行きそこで17年暮して，もうこのまま一生東京で暮すことになるかも，と思っていたところ，たまたま阪大にとってもらうこととなって関西へもどり，すでに18年勤めさせていただいている．つまり関西・関東両方で暮した経験がある．ついでにいうなら母は奈良県柳生の育ちであるが，父は千葉県出身で東京に親戚も多い．さらに東京に住んでいる間に江戸っ子の女を現地調達して（結婚当時友人が言った言葉），一応20数年一緒に暮している．だから東西比較論をやるには適した立場にいるといえよう．

しかし私はもちろん心情的には現在住んでいる大阪をひいきする．タイガースファンであり，アンチ巨人である．だからこの比較論も完全に公正客観的であるとは保証しない．

さて関西人と比べた場合の関東，特に東京人のきわだった特長は経済観念の差である．今，近所に店が2軒あり，全く同じものをA店では1,000円，B店では900円で売っているとする．このとき典型的東京人はどちらでもたまたま足の向いた方の店で買ってしまう．つまり彼（もしくは彼女）にとっては，必要なものを買うことが大事なので，「100円ポッチどうでもいいじゃないの」というわけだ．（彼ないし彼女もあとですぐ近くの店で100円安く売っていたと聞くと内心しまったと思うことはある．しかし少くとも人前ではそんな顔は，まずしない）．

一方，典型的関西人なら同じような店が2軒あれば両方のぞいてみて安い方で買う．そもそも賢い主婦ならふだんから近所でどの品物はB店の方がA店より安いというようなことをよく知っていて，無駄な金を使わないものとされる．いつも100円高い買物をするような人はしまりのない人，ないし頭の弱い人として軽蔑されるのが普通である．

筆者によれば，このような違いは東京と大阪の経済的生活の歴史的な差に由来している．東京は400年来政治の中心であり武士つまりサラリーマンの町であった．そこではお上につかえるか，お上の仕事をもらうことが大事でそれができれば暮しに困らず，また，あるだけの金を使ってしまっても，ケチケチして暮しても別に大して変りはないと考える土壌がある．一方，大阪人は伝統的に政治権力に依存せず自ら業を営み，日々「入るをはかって出るを制し」財を蓄えた人が繁栄してきた．従って経済に敏感であり合理性がその生活を貫くことになる．

私は本当の大阪商人といえる人に実はあまり近づきがないので論じる資格がないのだけれども，私の理解する理想的な大阪商人像は以下の通りである．まず合理性を貴び，一円といえども無駄に使わず家業に有効に投資することを正しい生き方と考える．またこうして蓄積した経済力を，必要と感じ有意義と感じるものには思いきって使う．単に商売だけでなく学問や芸術にも援助する．

2．大阪文化論

さて，多少理想化しすぎたかも知れないが以上のような大阪人像をもとに現在の大阪文化論をあえて試みることにする．近年関西の地盤沈下ということが良くいわれる．それをくいとめ，関西の復権を果すために，万博をやるとか新空港をつくるとか，国家財政をとりこむ案がよく出てくるようである．

*坪村　宏（Hiroshi TSUBOMURA），大阪大学，基礎工学部，合成化学科，教授，理博，物理化学

私にいわせれば，これは基本姿勢に少し問題があるような気がする．先にいったように大阪人の特色は国家財政にたよらず自らの業を築いてゆき，自らの文化をうちたてる点にあった．もちろん国家財政といってもその一部はわれわれの税金であるから，それだけのものはバッチリもらってくることを考えるのも大事だが，基本的にはこの伝統にもとづき，大阪人自らの努力によって特色ある産業をおこし，特色ある文化を築く覚悟をもたねばならない．

戦後36年間においても特色ある企業が関西に生れ，大をなしてきた例は多い．これは慶賀すべきことである．しかし反面大阪は文化を育てるためどれだけの努力をしてきたか，反省してみる必要があろう．

昭和初期においては大都市と地方の文化的格差は大きいものがあった．大都市，特にその頂点としての東京には人をひきつける魅力があった．これは明治政府以来の中央集権的政治・経済構造と大いに関係があったろう．しかし現在東京は依然として政治・経済の中心としての吸引力はあるけれども文化・生活面で人を引きつける魅力をもっているだろうか．私の答えはノオである．大多数の東京人は「そこに仕事があるから」東京へ集まり東京に暮しているだけで，昔のように地方人に比べて生活や文化で誇るものはもち合せていない．現在の東京は大体において，薄汚れた，不便な，まとまりのない巨大な集落のつながりにすぎない．

大阪も過去数十年，目先きの産業活動にのみ追われ都市としての魅力，高い文化など地方人を引きつけるものを，もたなすぎたのではないか．戦前の大阪の町は大体は巨大なスラムの集団というしかないような状況であった．最近の経済生長のおかげで多少住民の生活は豊かにはなったけれども，文化的な施設や公園その他の環境整備の程度の低さは戦前と大差ない．ＴＶその他エレクトロニクス技術によるマスメディアの発達はますます都市の魅力を減少させ，人を大都市から避け，緑の多い周辺へ散らせつつある．

関西の復権は，正しくは東京追随の姿勢を捨て，我々の力で新たな都市文化を育てることによってなし遂げられる．「大きいことは良いこと」ではない．たとえ人口やビジネスの量では劣っても日本中の人々が京阪神を訪れ，そこに住むことにあこがれるような何ものかをつくり出すことが大切なのだと思う．

3．大　学　論

10年前の大学紛争は今日の学生にとってはもう遠い過去のことになりつつある．もはやこの頃のことを知らない教授すらかなりふえてきた．あの大学紛争は結局のところ大いなるムダ騒ぎというほかないものと思う．しかし群集心理，政治力学といった観点からは興味深い現象だったといえる．

それはさておき，この大学紛争のとき私がもっとも残念であったことは，大して理由も意味もない一部少数分子の計画的騒擾のために豊中キャンパスはじめ大半の学部の授業も研究も一年近くストップする事態のなかで，これを残念に思い正常化を願う学生が非常に少なかったことだ．この多数の学生，（そして一部教官すらも！）の対応は私にとってこの上ないショックであり，これこそ大学の崩壊を暗示する現象とすら映じたのである．

あの忌わしい十数カ月のなかで，入試だけは全学一致して行われ警察も大部隊を派遣して守ってくれた．授業を受けなくても時期がくれば学生に免状をもたせ，企業その他外部社会はためらいなく彼らを採用していった．つまり，大学はトコロテン式学生押し出し作業だけ行っているという時期があったわけだ．

当時，学外の人と会うと「大学の先生も大変ですネ」と言ってニヤニヤするくらいで，大学は何をしていると憤る人も中にはいたにちがいないけれど，こんなことをして日本はつぶれると心配する人はあまりいなかったように思う．つまり社会はもともと大学での教育や研究というものに期待もせず，どうでもよいものと思っていたにちがいないと私には感じられたのだ．

そのまえから私は大学における自分の役割，なかんずくその中核としての自分の研究というものはいかにあるべきか折りにふれて考えていたが，この紛争中のショックは研究に対する私の考えにも大きい影響を与え，その数年後，太

陽エネルギーの有効利用の研究をやることになった一つの動機となったのだがそれについてはまた別の機会に書いてみたい．

当時から気がついて，近しい人にも言っていたことだが，いわゆるゲバ学生のアジ演説では不思議と関西弁を使わない．外部のえたいのしれない連中も多かったけれども阪大に籍をおく連中もかなり居たはずだが東京弁しか使わない．おそらくああいう演説では，大阪弁ではさまにならないのでないか．ゲバ学生らは人を心情的に導いて非合理性の世界につれこもうとするわけであり，一方大阪人の考え方は合理性の上に立って人と人の妥協の上にことを進めてゆくというのが基本的姿勢であると思われる．

これと関連して三浦朱門氏がおもしろい論文を書いていた．「各種学校になぜ校内暴力はないか」（文芸春秋，1981年5月号）．調理士学校などの各種学校は外部で課せられる試験に合格して資格をとり，且つ独立して仕事をするための知識・経験を積むことが生徒の目的であり，卒業免状だけもらっても大して意味がない．このように目的がはっきりしており，かつ卒業後の実力が外部ですぐさま物をいうという状況にあるから，生徒たちは授業をサボったりしない．いわんや授業拒否などナンセンスである．また教える側としても教育効果がすぐ自分らの商売につながるので真剣にならざるをえない．予備校なども同じような条件にある．

一方，大学では教育効果はそれほど分明にあらわれない．先ほど紛争中の体験で述べたように，社会は○○大学の入試に合格したほどの子供だからホドホドに働くだろうと思って人をとる．すなわち，権威のある大学なら入学試験と卒業式だけやっておけばよいことになるわけだ．

さて，このような大学の権威は一体いつまで続くだろうか．一部の大学人はそれによっかかって無為にすごし，一部の大学人は改革が進まないといってイラつくのが現状である．確かに現状ではAクラスの大学の権威は永久に続くようにみえる．しかし，50年，100年という長い時間スケールで見たとき，大学の権威も，各種学校同様，いつまでも続くわけでなく，中味のないものは結局衰退の道をたどるのではないだろうか．

さて大学紛争下の事態は全国どの国立大学でも大体似たようなものであったし，また，はしかのごとく一定期間たつとおさまってしまった．今となっては，これからのわが大阪大学を如何にしてゆくかということを考えるのが最大の課題であるが，ここでも私は大阪のもつ合理性と時代を先取りする積極性に期待したい．国立大学も時代と共に変革してゆくべきであるが，今の状況では二つの問題点があるように思う．一つは政府の管理が，ある面では強すぎて大学人みずから改革の意欲をもちえないような状態にあることだ．一つの思考実験として授業料や教官の定員，給料など大学で，ある程度自由に決められるようなことを許してはどうだろうか．今，公務員の定員削減が政府の大事な課題となっていて，その一環として大学教官の定員も数年来削減されつつあり，新らしい学科や研究施設の拡充もほとんど不可能に近い現状となっている．一面ではやむをえない気もするけれども，このため大学教官の人事は硬直化の一途をたどり，何を考えても実行不可能と映ずる事態である．

次にこれと矛盾するようだが国立大学教官の地位はあまりに安定すぎる．一たん教授・助教授になったが最後，何人もクビにすることはもちろん，動かすことすらできない．この点からも私は大学改革は短期的には不可能と思っている．なぜなら改革とは要するに人を動かさなければなしえないことだからだ．今の大学は教授会が運営の責任をもっているが，限られた定員と予算の中で，お互い同僚を左遷したり，クビにしたりするようなことを決めることが如何に困難なことか考えてみればすぐわかる．

だから私は，今の大学はあとしばらく，（それなりに役に立つ間は）そのままで運用し，新たに適塾か懐徳堂のような大阪町民のモデルスクールをつくってはどうかと考えている．それは合理性を貴ぶ大阪の町民が意義を認め，財布の紐をとくだけの何かをもったものでなくてはならない．

長い伝統をもち国家予算に支えられ威容を誇

る現在の国立大学に対し，町民のバックアップでそれと対抗するようなものを作ることを考えるなど荒唐無稽に聞えるかも知れない．しかし市井のみすぼらしい緒方洪庵の適塾と当時の官学の中心であった幕府の昌平黌とどちらが世を動かす人材を育てたか比較してみれば，このような案は少くとも考えてみるだけの値打をもっているように思えるのだが．

現在は、"鉄の文明"と評され、今日の世界から鉄を無くしたら、恐らく一切の文化は終息するだろうといわれています。
DNTは、創立の礎となった重防食塗料「ズボイド」を通じて既に半世紀近く私たちの大切な鉄を守りつづけてきました。
そして、これからもDNTはズボイドを生みだした重防食技術をベースに、独自の技術開発を進め、さらに、海外の優れた技術と協力しあって、より優秀な重防食システムとして結合させ、限りある資源を守りつづけていきます。

●創造と調和をめざす●

DNT
大日本塗料

●大阪市北区西九条6-1-124
〒554 ☎(06)461-5371(大代)
●東京都千代田区丸の内3-3-1
〒100 ☎(03)216-1861(大代)